

## アメリカン・ボード宣教師文書

——同志社女学校女性宣教師を中心として——

〈M. F. デントン書簡一訳および註一〉(8)

阪上 敦子 監訳  
杉野 マリ子  
松波 満江  
秋山 恭子  
竹田 清子  
柿本 真代  
小林 弘美

### 書簡翻訳：前号からの続き

〈バートン書簡 B-10〉【杉野マリ子 訳】

1901年 1月23日

メアリー F. デントン  
カリフォルニア州  
ロサンゼルス  
ダウニー通り813番地

拝啓 デントン様

嬉しいご報告をお届けします。運営委員会では、あなたから財務担当者への要請にしたいが、日本への帰国を認める決議が昨日快諾されました。但し正確な帰国日程はご自身でお決めください。再支度金<sup>1</sup>については財務担当

者と話し合いをしたばかりです。

この支給に関しては、ここ [ボストン] のアメリカン・ボードを通さず、ウーマンズ・ボードが直接宣教師に支給するのが慣例です。ウィギン氏<sup>2</sup>がどう処理するかは、はっきりとは分かりかねますが、恐らく、まず再支度金をあなたの方へ送り、同時にその請求書を太平洋ウーマンズ・ボードに送るのではないかと思います。太平洋ウーマンズ・ボードに直接手紙を送っておられるのなら、ウーマンズ・ボードは恐らく充当金をすでに用意してくれているでしょう。デントンさんを困惑させるような遅れがないようにと祈ります。

帰国のための支度金を要請しておられるという事などから、ここ東部であなたにお会いする機会は全くないということでしょうか。そうだとすると大変残念なことです。かといって東部に是非お呼びする明確な理由があるわけではないのですが。各地での多くの講演や公務で、すっかり疲れ果てて日本へ戻られることがないように願っています。太平洋地域の多くの教会で、素晴らしいお働きをなさったことはよく存じております。

敬具

ジェームズ L. バートン

1. 再支度金 refit のこと。宣教師が7年の初任期を終え、再度赴任地に派遣される際にアメリカン・ボードが支給する支度金。家族持ちか独身か、更に男性か女性かによって細かく額が決められている。1912年度の *Handbook for Missions and Missionaries of the ABCFM* によると、デントンのような独身女性の場合、初年度支度金は250ドル、再支度金は125ドルであった。
2. Wiggin, Frank H. (生年不明-1920) アメリカン・ボードの財務担当者。1886年に財務局で働き始め、前任の Langdon S. Ward の死去により1895年に副財務担当 (Assistant Treasurer)、1896年に財務担当 (Treasurer) に就任する。1920年に亡くなるまで24年間その職にあった。

〈デントン書簡280〉【松波満江 訳】

ロサンゼルス

ダウニー通り813番地

[1901年] 2月2日

拝啓 パートン博士

1月25日付のお手紙有難うございました。再支度金許可の申請手続きが早すぎたのではないかと心配していますが、東部からサンフランシスコへ戻ってから全てに手を付けるより、むしろ今のうちにこまごまとしたもの、衣類などをトランクに少しづつ詰めて、種々のささやかな計画を立てておきたいと思っておりました。実際に東部へ行けなければ本当に残念なのですが、もし「私を呼び寄せるのに十分な理由がない」<sup>1</sup>とおっしゃるのでしたら勿論諦めます。でも行かなければ親戚にも会わないことになりまして、本部であなた様とお目にかかりたいという希望や、教育機関をいくつか訪れたり、休みを取ったり、西部では得られなかった新しいアイデアを取得することもできなくなります。アメリカの最高レベルの女子の学校を見て回ることなく女学校の仕事を続けるべきではないと思っておりました。そして望みに匹つたりの助けとなる人を見つけられるものと期待していました。補充の教師を見つげるために精一杯のことをせずに戻るべきではないと思いますので。

もっと早くそちらに行くつもりでしたが、ここの教会で話す機会をそのために断るべきだとは思いませんでしたし、このような機会は今も引き続ききています。太平洋ウーマンズ・ボードのご婦人方は自由に断ってもいいとのことですので、最終日は2月6日にするつもりです。

最初お手紙をいただいたときは、私が東部へ行く大きな理由がないのご意見に同意しようとしたのですが、丸一日考えてみますと、日本で役に立つかどうかを決めるのは、西部で得たものすべてにも増して、休みや情報、刺激など、東部で得られるもの次第のように思われます。ですから、パートン

様からお手紙をいただくまでは日時を決めないことにいたします。もし来ないほうがいと率直におっしゃって下されば、喜んであなた様のご判断に従います。でも、とても行きたいですし、「来なさい」とおっしゃってください！

お知らせしたベリーさんとヒースさん<sup>2</sup>からは何の連絡もありません。ダニエルズ博士<sup>3</sup>がお二人と連絡を取ってくださったことと存じます。宣教師の志願者に通常送付される書類の写しを送っていただけないでしょうか。ヒースさんがすぐに承認されて、ケースさん<sup>4</sup>と旅程を共にして日本に派遣され、直ちに鳥取に行けるとよいのですが。鳥取でのお仕事は言うに及ばず、バートレット家<sup>5</sup>の人たちのことがとても心配でたまりません。ヒースさんならきっと言葉も習得できると私は確信していますし、日本で役に立つ宣教師になれるだけの並外れた素質を持っていると思います。形式的な手続きを飛ばしてすぐに任命できて彼女を出発させられるような、そんな近道はないのでしょうか。

この問題に関して差し上げたお手紙<sup>6</sup>は、あなた様がメキシコに行っておられる間に届き、そのまま放置され、ダニエルズ博士の手元にやっと届けてくださったことは覚えておられると存じます。ダニエルズ博士から説明があったかも、とお考えのようですが、そのような手紙は受け取っていません。ダニエルズ博士にお手紙を書こうと思っていたのですが、すぐに東部へ行くつもりでしたので、延ばし延ばしになっておりました。メソジスト伝道局のハリス博士<sup>7</sup>は、ヒースさんの友人で、彼女の宣教師としての適性を高く評価されていますし、きっと大いに役に立ってくれると信じています。

長々と失礼いたしました。あなた様からのお便りを切に望んでいることはお分かり頂けるでしょう。この手紙がきちんと届くか心配です。書留にいたします。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. [B-10] でパートンが書いた言葉。この文言にデントンは感情的になる。
2. Miss Very と Miss Heath 前出 (B-9) デントンはこの二人に大いに期待したが、実際には来日せず記録にも残っていないため詳細は分からない。このため以後、註では取り上げない。
3. Daniels, Charles H. (1847-1914) ニューハンプシャー州ライム (Lym) 生まれ。アーモスト大学とユニオン神学校を卒業。アメリカン・ボードで働く前はいくつかの州で牧師を経験。1888年ニューヨーク市のアメリカン・ボード地域主任 (District Secretary) となり、前任の E. K. Alden 引退後はボストン本部の幹事 (Corresponding Secretary) に就任する。
4. Miss Case アメリカン・ボードの来日宣教師リストに名前はなく詳細不明。
5. Bartlett, Samuel Colcord (1865-1937) と妻 Fanny Slater (1874-1963) のこと。妻ファニーは同志社英学校で教鞭を取った M. L. Gordon の長女。夫のパートレットはダートマス大学卒業後、3年間 (1887-90) 同志社で教え、帰国後、修士号を取得。さらに1894年アンドーバー神学校で按手を受け、同年ファニーと結婚して再来日。鳥取、小樽で1912年まで伝道。この当時は鳥取ステーション所属。ファニーの父ゴードンは一時帰國中、子供たちの小学校の教師デントンと知り合い、彼の推薦でデントンは宣教師として来日して同志社で教えることになった。このことからデントンは旧知の間柄のパートレット夫妻のことはとりわけ気にかかっていたと思われる。
6. 1900年12月14日付のデントン書簡 [279] に「9月か10月に出した手紙の返事がない」とあり、パートンが直ぐ探したところ、10月11日付の手紙2通が未処理で見つかった。12月21日付のパートン書簡 [B-9] でデントンにその経緯を説明し謝っている。【*Asphodel* 52, pp.113-115】参照
7. Dr. Harris 詳細不明

〈パートン書簡 B-11〉【秋山恭子 訳】

1901年2月9日

メアリー F. デントン  
カリフォルニア州  
ロサンゼルス  
ダウニー通り813番地

拝啓 デントン様

昨日クック夫人<sup>1</sup>と少し話をしました。この夏、あなたを夏の屋敷、クリフシート<sup>2</sup>に1か月間招待したとのことでした。ご招待を受けられて、1か月間完全に休んで静かに過ごすことが出来ればよいのにと望みます。きっと帰国後の仕事の助けとなり、着想を生み出す源になることでしょう。そして日本へ帰国する前には本当に静かな休みが必要と思います。大陸を横断して来られるにはお金の問題があるかもしれません。それは考慮すべき最も難しい問題の一つです。私はサンフランシスコの太平洋ウーマンズ・ボードがここボストンでの滞在費を十分に払う余裕があると考えております。ご自分で支払えるかどうか、私にはわかりませんが、何とかうまく経済的な部分をやりくりできるなら、是非ともボストンへお越しいただきたいです。クック夫人のお話しでは、ニューイングランドには来られたことがないとのことですので、ここボストンのウーマンズ・ボードの役員の方たちに会われることはとても価値がありますし、アメリカン・ボードの我々も勿論お目にかかれるのを嬉しく存じます。ですので、できれば来る段取りを立てていただきたいです。

敬具

ジェームズ L. パートン

1. Cook, Georgiana Hemingway (1842-1921) 世界的な伝道者 Joseph Cook (1838-1901) の夫人。東部ウーマンズ・ボードの役員。夫のクックは1880年から1883年にかけて世界各地を伝道して成功を収めた。この伝道旅行に妻のクック夫人も同行。1882年4月には日本にも来日した。夫のクックは夫人がデントンをクリフシートに招待したこの年の6月に亡くなっている。
2. Cliff Seat または Cliffseat. New York 州の北東、Vermont 州との州境の小さな町 Ticonderoga にある Joseph Cook の夏の屋敷のこと。

〈パートン書簡 B-12〉【竹田清子 訳】

1901年2月11日

メアリー F. デントン  
カリフォルニア州  
ロサンゼルス

拝啓 デントン様

同封します手紙を書いた後に、2月2日付<sup>1</sup>の手紙が手元に届きました。こちらから出す前に届いた事をうれしく思います。あなたをここへ呼ぶ強い理由がないと書いた唯一の理由は単に金銭上のことです。勿論、アメリカン・ボードはあなたに追加の旅費を払う事は出来ません。すべて太平洋ウーマンズ・ボード次第です。手紙を読み、日本に帰国されてからのお仕事についてさらによく考えてみますと、さまざまな学校を訪れたり町の人たちとの交流のために太平洋ウーマンズ・ボードが東部への旅費を払うことはふさわしいことと思います。あなたには大きな安らぎと励ましの源となるばかりでなく、ますますご活躍の場を広めることになるでしょう。といいますのは、多くの新しい考えを得ずして東部へ来るということとはできないからです。デントンさんが来られるといいのですが。

ベリーさんとヒースさんについてですが、返事がなかった最初の手紙に注意を促したあなたからの2通目の手紙<sup>2</sup>を受取ると、返事にも書きましたように、すぐにダニエルズ博士<sup>3</sup>と話をしました。博士は速やかな任命のためお二人に手紙を書きましたが、今までどちらからも返事はありません。任命を急がせる方法としては、本部からの連絡に志願者に即答してもらうのが一番です。すべてはお二人からの連絡待ちです。宣教師の任命では煩わしいお役所流の手続はないとあなたにはよくわかっていただきたいのです。適切な推薦状が集められ次第、これは誰もがすぐに対応して下されば1週間でも可能でしょうが、書類の承認がここ[ボストン]でなされ、その推薦状は宣教師を引き受けるウーマンズ・ボードに委ねられます。運営委員会は、この人たちがウーマンズ・ボードのどこかに採用されて、初めてどちらかを任命する

でしょう。そして当然太平洋ウーマンズ・ボードの所属になるでしょう。宣教師志願者の為の申し込み書類はありません。記入する特別な用紙也没有せん。当局としては、単に志願者に連絡できる照会先を聞くことと、同時に返答が必要な設問が載ったマニュアルを送るだけです。両者からの返信を受けとって健康診断書が手元に届けば、すぐにでも任命への道筋がつけられます。

ダニエルズ幹事の手紙になぜご婦人方が返信されないのか理解できません。返事が非常に遅れていますので手続きは更に遅れるでしょう。と言いますのは、推薦状は多分太平洋沿岸の地域で集めねばならないし、本部から照会してその返答を受け取るのに2～3週間の間が必ず空くでしょうから。そして運営委員会の承認が得られればですが、ウーマンズ・ボードが前もってこのお二人のどちらか、または両方を条件付きで採用するという意思表示を示しておけば話は別ですが、書類が整えば採用に向けてウーマンズ・ボードに送られねばなりません。推薦状などの送付を求めているダニエルズ博士の手紙に、あなたから返事を出すようにこの若い方々をせかせる一方、太平洋ウーマンズ・ボードにお二人を採用してくれるように働きかけて下されば問題は容易になると思います。

敬具

ジェームズ L. バートン

1. デントン書簡 [280]
2. デントン書簡 [279]
3. ダニエルズ博士 前出 (280)

〈ダニエルズ書簡 DA-1〉【柿本真代 訳】

1901年2月14日

メアリー F. デントン

カリフォルニア州  
ロサンゼルス  
ダウニー通り813番地

拝啓 デントン様

あなたがゴードン夫人<sup>1</sup>に宛てて出された手紙が手元にあります。ボードに対してただちにヒースさんを宣教師に任命し、日本へ派遣するよう急がすものでした。ヒースさんとベリーさんについての最初の手紙は、パートン博士の不在時に送られてきたため、そのうちの1通にお書きになっていた、このお二人と連絡を取ってはどうかというご提案を不覚にも見落としておりました。

しかし、12月には私からその二人へ手紙を書き、書類を送り、当局が必要とするものについて説明しましたが、いまだに返事は届いておりません。お二人と連絡を取り、任命してもよいという十分な保障がない限り、このような場合にはボードは如何なる行動も起こせません。通常でのやり方以外にこの目的をかなえる方法はありません。まずは運営委員会の承認を求めて、それからウーマンズ・ボードの採択を経て、ようやく任命となるのです。この一般的な手続きが妥当であることはあなたにもお認めいただけるでしょう。委員会がこのような手続きを踏まえずに事を進めたなどというケースは聞いたことがありません。12月に私が送った手紙にどちらからも返事がないことを思えば、任命に対して正式に申し込みをする意思がないものと思えます。パートン博士とは協議し、この手紙に私が書いた内容についてはすべて確認をいただいております。最初に遅れがあったことは極めて遺憾に思いますが、お二人から返事がないこともまた残念です。

敬具

C. H. ダニエルズ

1. Gordon, Agnes Helen (1852-1940) 1872年7月 Marquis Lafayette Gordon (1843-1900) と結婚。同年9月アメリカン・ボード宣教師となった夫と来日。新島襄とは夫がアメリカにいたところからの知り合いであった。後にアメリカン・ボードの援助により創立された京都左京区新堀町仁王門の相愛幼稚園の初代園長となる。アメリカへ一時帰国中、子供たちの小学校教師だったデントンと知り合い、デントンを同志社に派遣するきっかけを作った。

〈デントン書簡281〉【阪上敦子 訳】

パサデナ

[1901年] 2月

拝啓 パートン博士

お手紙有難うございます。先ほど受け取りました。早速ヒースさんに手紙を書くつもりです。そしてジュエット夫人<sup>1</sup>にもヒースさんがすぐに準備ができて太平洋ウーマンズ・ボードが彼女を採用可能かどうかお尋ねいたします。私はずっと多忙にしております、しばらくヒースさんには手紙を書いておりません。でもきっと役に立つ宣教師になることでしょう。年を取っていることで場合によっては賢明とはいえないのも事実ですが、それでもヒースさんは健康で聡明で傑出した素晴らしい働き手です。ペリーさんについては、本人から再度連絡を受けてからあなた様にお便りを出すつもりです。

太平洋ウーマンズ・ボードに東部へ行かせてくれとはお願いできませんでした。この数か月間各地を移動して回るのには確かにとても高くつきました（勿論、太平洋ボードのご婦人方のご親切にも汽車賃を払ってくださって、さらに9ドル近くも余分にいただきました）。でも旅を続けてのこのような暮らしは必ず経費が多くかかりますし、自分では始末することができません。[太平洋ボードの] ご婦人方が募金を集めるために大変なお仕事をされているのを多く見て来ましたので、これ以上上乘せして負担して頂くのは忍びません。出費がこのように多くあるのです。昨日、あるご婦人が私に「印刷代と部屋代、そして手伝いの人や宴会でのお食事代の経費がかかるのです！」

と言われましたように。ですから、私のための費用をこれに付け加えてくれとは言えませんので、バートン博士、どうぞ[私の東部への旅費を太平洋ウーマンズ・ボードに] 請求なさらないでください。

太平洋ウーマンズ・ボードのご婦人方はきっとアメリカン・ボードが宣教師の旅費を支払っていると思っておられるでしょうし、日本におりましたときには、バートン様からのお手紙を明らかに間違っていて理解しておりました。賜暇の許可を申請した折、そのときはボストンへ行く許可を求めておりましたので、その申請へのあなた様の肯定的なお返事から、私の旅費も支払っていただけるものと理解しておりました。日本へきている他の宣教師の東部への旅費もすべて支払われていたのと同様に、です。叔父の家がずっと私の実家ですが、その叔父が東部に住んでいるということをご存知ですね。[東部へ] 行かないということは「故郷」には本当に帰らないということです。でもどうぞ東部へ行くのを私が諦めきれないとは思わないでください。少し休みを取るようにしますし、カリフォルニアでもよい活動をしている学校がありますので、そのいくつかを見学するつもりです。そしてたぶん誰か新任の宣教師、新しくてよい考えを沢山持っていて私たち古参の者がお付き合いすることで元気になれるような、そんな宣教師を多分やりくりして派遣してください。

こちらは今とてもよい季節ですので、楽しんで、そして当地のものから恩恵を受けるつもりです。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. Mrs. H. E. Jewett 太平洋ウーマンズ・ボード第4代会長 (在任1890-1899)。3代会長 Miss Lucy Fay の時代 (1883-1889) には同会の幹部を務めた。1877年以來、毎週 *the Pacific* にボードの記事を寄稿していた。

〈デントン書簡282〉【小林弘美 訳】

メアリー F. デントン  
ロサンゼルス  
ダウニー通り813番地  
[1901年] 2月22日

拝啓 バートン博士

2月11日<sup>1</sup>と2月9日<sup>2</sup>付のお手紙を読み返して、私が東部へ行くことを太平洋ウーマンズ・ボードに手紙で書いてくださったのではないかととても心配しています。どうぞ書かないでください。私の手紙のファイルはここ [ロサンゼルス] にはありませんが、まだ日本にいたころ、ボストンに赴く私の願いに賛成して、返事を書き送ってくださったあなた様やジュエット夫人<sup>3</sup>の手紙もあると思います。しかし [ボストンへ] 行かない方がいいのかもしれない。ともかく今頃になってまた持ち出すことはできません。私は [ロサンゼルスで] 満足していますし、行けなくてもそんなにがっかりしていません。ですから太平洋ウーマンズ・ボードへは手紙を出さないでください。

宣教師を任命するときは、急がば回れでなければならないのはよく判ります。私は女性宣教師がなぜ申し込みの手続きを進めないのかを確かめようとして手紙を出しました。人を遠ざけるのはしばしばささいなことが原因のようです。もしかすると、私たちには女性宣教師を採用できないと思っているのかもしれない。志願者にダニエルズ博士<sup>4</sup>が書類などを送られるように、私にも送っていただきたいのです。そうすれば誰が見つけたときにどう手続きするか分かるでしょう（でもこの二人が期待を裏切ったら、他の人を見つけれないのではないかと心配です。少なくとも二人の女性宣教師を連れて帰りたいです）。

ロサンゼルス第一会衆派教会牧師のワレン F. デイ博士<sup>5</sup>は日本への旅行のことを話しています。

[書簡5枚目 下部切れている]

[書簡6枚目 右側切れている]

デイ博士はアメリカン・ボード [A.B.C.F.M]<sup>6</sup>のメンバーですので、ボードから私たち日本の教会へ何らかの特別なお役目を持ってきてくださるといのですが。もちろん彼は自費で来られますので、ボードには何も負担もかかりません。でももし正式な挨拶状を携えて来られるなら、教会と宣教師の両方により多くのものをもたらしてくれるでしょう。ご存知のように、カリフォルニアでも主要な牧師のお一人で、保守的な神学者で、立派な風采とお人柄の方です。奥様も同様に有能です！こんな機会にデイ博士にお働きのたいて、[日本の教会の現状について] この太平洋岸の教会の人々の耳に入れる機会を日本人に与えられないものでしょうか。

8枚目 左端切れている

ここは**私の**教会ですから、もっと関心を抱いてくださればと思います。それに私たちの日本の教会がこの「公式」訪問によりどんなにか利益を得られるかわかります。

さらにもうひとつ付け加えますと、同志社女学校に毎年500ドルの援助を、という要請に太平洋ウーマンズ・ボードはとて誠実に、そして寛大に伝えてくださいました。でも私たちの校舎は**とてもひどい**状態です。ラーネッド博士<sup>7</sup>から、300ドルあればある程度校舎の修理ができるとの手紙を受け取りました。オルガンは壊れる寸前です。そして音楽を教えられる新人の女性を採用したり、あるいはその方面で日本人の音楽教師に働いてもらわなければならないなら、ピアノ、これはどうしても必要なのです。女学校の後援者の方々に特別にこれらの要望を訴えてもよろしいでしょうか。私がお願いするのを Barton 様には是非ともお許しいただきたいのです。

[後援してくださっている] アメリカの私たちの教会が日本での状況を見聞きされたら、[募金に] 応じてくださらないとは信じられませんし、女学校が有用であり、強くなることを切に願っております。強力になると同様、お役に立つのを切に望んでおります。直ちにお手紙をくださり有難うござい

ました。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. バートン書簡 [B-12]
2. バートン書簡 [B-11]
3. ジュエット夫人 前出 (281)
4. ダニエルズ博士 前出 (280)
5. Day, Warren Finney (生年不明 -1913) ロサンゼルス第一会衆派教会牧師(在任1894-1913) 1901年からは名誉牧師。1913年1月没。妻の Rachel B. Day は Madam Day と親しみを込めて教区では呼ばれていた。夫婦そろって海外伝道には意欲的で、募金活動にも積極的で有力な牧師として知られていた。
6. A.B.C.F.M. アメリカン・ボード外国伝道協会 (American Board of Commissioners for Foreign Missions) の略。
7. Learned, Dwight Whitney (1848-1943) 1873年イエール大学大学院卒業。1875年に来日し京都ステーションに所属。52年余り、同志社の教育に尽力。同志社大学初代学長。